

「一人の人の罪と死がすべての人に」

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。

ローマの信徒への手紙 5 章 12 節

+++

この箇所を知るためには旧約聖書の最初の部分を理解する必要があります。

創世記 2 章

2:7 主なる神は、土（アダム）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

2:8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

2:9 主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。

...

2:15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。

2:16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。

2:17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べるはならない。食べると必ず死んでしまう。」

++++

そして

創世記 3 章

3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

3:2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。

3:3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

3:4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。

3:5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

3:7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

3:8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、

3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」

3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

### 1) はじめの罪

人間は神様によって創造された素晴らしい世界に置かれ、そこでの役目が提示され、神の守りと祝福が備えられました。

そして、そこにひとつの枠が設けられ、それを喜んで守れるなら神の祝福は常に現実的に感じられる生き方があったはずでした。

神様が人間に与えたたったひとつの禁止命令は

「園のすべての木から取って食べなさい。

ただし、善悪の知識の木からは、決して食べるはならない。食べると必ず死んでしまう。」

（創世記 2 章 6～7 節）

「園の中央にある善悪を知る知識の木の実は取って食べてはならない」とありますが、その他の木の実は全部食べることができたのです。人間は天邪鬼なところがあり、禁止条項がつけられると、そちらのほうに興味を持つことが多くなります。

「善悪を知る知識の木」とは、なんと象徴的な名前でしょう。「これを食べたら、必ず死ぬ」とさえ言われているものです。

しかし、人間はそれを取って食べるのです。

そして、神の知恵や知識とは別の意味で、つまり、神様に成り代わって「善悪を判断できる」と考え、「自分の考えは正しい」と自慢し神様のもっておられる考えや判断を基準にせずに「頭の中で裁きを実行」するようになったのです。

言い換えれば、人間の心に、神様ご自身の中心軸と人間的な判断基準による中心軸のふたつが、常に並んで存在することになりました。

さらにいえば、神の示す方向性とは別のものを断定的に選ぶ「自己・エゴ」という判断基準が善悪を知る知識の実を食べたことでそれぞれの心に育ってしまうことになりました。

## 2) すべての人への継続

そして、この自己判断、自分中心的な決断によるズレた心は「わたしたちにまですっと継続的に受け継がれて」います。

誰の心の中にも「エゴ」があり、宗教心や道徳心なども育ちますが、基本はエゴが暴れまくっているので「人間の心の問題」が増大し、拡大していくのです。

## 3) すべての人が死ぬことになった

「死」というのは「肉体的な死」や「関係の死」そして「自己決断による判断の的外れの常態化」があります。

これらのことはユダヤ人にはわかりやすい話だったと思います。

でも、これは現代人の私たちのためでもあります。

問題は自己判断を繰り返す「エゴの的外れな心」と「肉体と精神を追い詰め、関係を断ち切り孤立の中に追い込む死」がいつも身近にあることです。パウロは、これらの状況がすべての人に継続的にのしかかっていることを語ろうとしています。

律法を守ったか守らなかったか、などという問題ではなくもっともっと現実的、実存的な問題として罪と死の問題を取り上げようとしているのです。問題はユダヤ人だけの問題ではないからです。そして、それらについて、絶対的に助けと救いが外側から必要です。

その自覚がとても大切です。

\*\*\*\*

すでに語られた部分を引用しておきます。

5:6 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。

5:7 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。

5:8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

5:9 それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

5:10 敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。

5:11 それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。